

Jゼミ最終発表会が実施されました 1月19日(火) @ 本校視聴覚室

●1年間の研究の成果を、同級生、下級生、先生方に見ていただきました！

年間を通して行われてきた研究の成果を、ポスター発表という形で披露しました。アドバイザーとして、社会班には前田先生、国語班には團野先生が再度参加くださり、建設的な助言を数多くいただきました。発表の直前まで、何度も放課後に残って研究に取り組んだことにより、各班のこだわりが聞き手に十分に伝わる発表となりました。また、英語班は英語で発表を行い、本校ALTのマーカス先生と近隣の学校のALTの先生方5名に聞いていただきましたが、研究内容だけでなく、発表の英語が非常に伝わりやすかったと高評価を受けました。

今年度のテーマ一覧

社会A班「複雑化するいじめへの対応」
社会B班「彼らはなぜ迫害されたのか」
社会C班「QOLの向上に向けてのテレワークの提案」
国語D班「平安時代の女性の死生観」
国語E班「宮沢賢治の作品に影響を与えたもの」
英語F班「日米間の言語的コミュニケーションの違い」
英語G班「小松高校生のスピーキング力upのためにできること」
英語H班「伝わる『ジャパニーズイングリッシュ』」



○文化部発表会の代表はE班に決定しました。3月19日(金)公会堂にて、1年生を対象に発表を行いました。

《Jゼミを終えて～生徒の感想～》

- Jゼミを通して、多方面から考えることに気を付けるようになった。自分の尺度で発表しては、せっかく調べたことが相手に伝わらないという事態が発生してしまうので、何をしても、まずはいろいろな方面から考えようと思う。このような考え方により、テレビで見るニュースなどにも疑問を持つようになった。
- 私は「調べ学習」と「研究」の違いについて悩んだ。しかし様々なアドバイスを受ける中で前者は自分で探した情報をまとめることで、後者はそれに加えて自分の新たな考えを打ち出すということ、体験を通して知ることができた。これから先も、研究では「自分の考えを立てる」ということを実行していきたい。
- 初めて長期間での研究を行ってみて、行き詰まることや失敗したこともあったが、班員と協力し、より良い研究になるよう努力を続けられたことは、本当に良い経験となった。



6月の学校再開以来、熱心に頑張る皆さんの横顔を見守ってきました。春秋には、肌寒い視聴覚室、暑かった理系の実験室(情報室が使えない時期がありました…)

どの班もよく話し合い、研究を深めていました。また、授業がない日にもこだわりぬいて研究を続けた班もありました。

この頑張る、こだわる姿勢は、来年度の受験勉強はもちろん、大学での研究活動や社会人になってからの活動にも必ず生きてくると信じています。本当にお疲れさまでした！皆さんの「知のバトン」は後輩たちに受け継がれていきます。

石川県 NSH 課題研究合同発表会(ONLINE)

2月8日(月)~2月19日(金)

●新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、例年のように大きなホールでの発表はせず、オンラインで動画を配信するという形式になりました。本校の他に、金沢二水、金沢泉丘、金沢桜丘、七尾の各校から合計33の班が動画による発表を行いました。

このような形式は今年度初であり、石川県内の高校のみの配信となりました。小松高校では、2月16日(火)に21Hが、2月19日(金)に22Hが動画を視聴し、他校の発表グループに対してコメントを書きました。石川県教育委員会や他校からのコメントが届きましたので、以下に紹介します。

(A) SNS等によるインターネットを介した「いじめ」は、看過できない社会問題です。題材はシンプルですが、データによる根拠に基づいて論を展開しようとしていることが分かり、「シンキング・エラー」について取り上げるなど、強いメッセージ性も感じられました。「ミクロ」、「マクロ」という新しい視点で整理しようとする試みも興味深かったです。ただ、メールで相談できる場所を増やすというのは現代のニーズに合った方法ですが、高校生である自分達に具体的に何ができるか、という視点での考察も入るとなお良かったのではないかと思います。



(B)「迫害」は過去の出来事ではなく、今なお世界の問題となっており、このことを取り上げたのは、大切な視点だと思います。また、世界的ニュースとなる大規模な迫害でなくとも、身近なところで「迫害」に苦しんでいる人がいることについても私たちはきちんと目を向けなくてはなりません。ただ、テーマが壮大であるため、自分たちで現実的な解決策を提示するという段階に至るのは難しく、調べ学習の範囲を脱することができていませんでした。(サラエボ交響楽団のような具体を知ることには非常に価値がありますが、高校生ではなかなか難しいです。) リサーチクエスチョンや仮説を見直すことも必要だったのではないかと思います。

(C) 旬なテーマを扱っていると思います。保護者へのアンケート実施等、生の声を集めようとする姿勢もすばらしいです。(可能ならば、テレワークを実施している企業に電話インタビューをして、企業側の意見も聞けるとより良かったです。)ただ、人間らしい生活の向上をテーマにしているのに、結論が業務の環境に特化されているという発表内のずれが気になりました。そもそも、「人間らしい生活」とは、どのような人たちの、どのような生活を指しているのでしょうか。万人に共通する解決策を導くのは難しいですから、まずは研究する対象を絞って明確にした上で、業務改善とのつながりなどの説明に繋げていけたらなお良かったのではないかと思います。

(D) 探究の動機が面白い着眼点だと思います。ただ、要所要所でもう少し丁寧な説明が必要です。例えば「現代人が想像しにくい死因とはどういうものか」、「浄土教の思想が当時どれくらい人々に信仰されていたのか」など、知識がない人にも伝わるよう工夫してください。また、「平安時代の貴族の女性」といっても、年齢や身分、結婚や出産等の経験の有無など、条件が変われば、描かれ方も変わります。扱う作品も変わってきます。研究の途中であっても、対象を絞ったり、仮説を見直したりすることで、最終的には研究が深まったのではないかと思います。今後、様々な古典作品を読む時に、どのような女性が登場するか、どのように描かれているか、ぜひ意識してみてください。



(E) 「オノマトペ」に注目したことをきっかけに、作者についてさらに探究しようという意欲が見られたことには好感が持てます。賢治作品以外ではどのようなオノマトペが一般的だったのか等にも触れ、比較するなど、もっと「オノマトペ」に注目して研究してみると面白い発見があったかもしれません。気になったのは、全体の流れの内、先行研究のまとめと、皆さんのオリジナルの考察の区別が、途中から曖昧になっていた点です。(例えば、取り上げた3作品の「宗教に通ずる部分」は皆さんのオリジナルの考察だったのでしょうか?) その点をもっと明確にすると、より魅力的な発表になったのだと思います。

(F)日本人とアメリカ人のコミュニケーションの違いについて、分かりやすくまとめてありました。そもそも文構造が全く異なるので、日本語で思考した内容を英語に変換するためには、日頃の意識や継続的な訓練が必要だと思います。できれば、日本の高校生が今のような意識で行動すべきなのか、具体的な提案があると良かったのではないのでしょうか。例えば、英語の授業の受け方（意識も含め）は今のままでいいのでしょうか？ また、いざという時に自分の意見を明確に述べるためには日本人同士のコミュニケーションの際、何を意識していなければならないのでしょうか？ 誰かに教えられたノウハウではなく、皆さん自身が必要だと思うことを実行し、検証した結果を紹介できれば、より説得力が増したと思います。

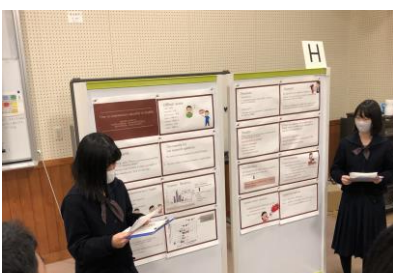


(G)英語のスピーキング力向上のための方策について考える内容でしたが、アンケート調査を通じた分析や文献からの考察、根拠が示されていたので、わかりやすい発表になっていました。フィンランドと日本の英語教育の違いの説明等にも触れてあれば良かったと思います。気になったことは、スピーキング力アップのための提案を実際にやってみることはできなかったのかということです。「小松高校生」に効果があるかどうかは、検証しなければ分かりません。言語の習得には時間がかかり、限られた時間では明確な結果が出ないかもしれませんが、皆さん自身の検証があるかないかで、発表の印象は大きく変わると思います。

(H)イントネーションは短期間の練習で変化が見られるうえに、イントネーションを意識すると英語の聞きやすさも変わるというのは、非常に心強い意見です。20人のALTに協力してもらったという点も、説得力を増すことができている。もし可能であればイントネーションを付けるための練習方法や自己チェックの方法を提案できると良かったと思います。また、発表の中でも「イントネーションを意識すると、これだけ変わる！」という違いが分かるような話し方を実演してみて、ピフォー・アフターを示すことができれば、聞き手の関心が高まると思います。内容は興味深かったので、ぜひ聞き手を引き込む発表とはどのようなものなのかを考え、今後この経験を活かしてってください。

【他校の視聴者からのコメント】

- (A) ● 最初に「いじめ」の定義の変化に注目していたのがよいと思いました。現代ならではの変化に気づかされました。「いじめ」の見方を変えるという発想も驚きました。素晴らしい発表をありがとうございました。
 - アンケートなどの事前調査が徹底されていて、資料も多く、説得力のある内容だったので素晴らしいと思います。対策について、学校や政府が主体的に動く対策を案じていたと思いますが、それだけでなく、高校生の私たちにもできる対策を考えたらより効果的だと思います。また、今あげられている、親や学校による管理・相談場所を増やすという対策を実践するために実際にしかるべき場所に提案してみたいと思います。頑張ってください！
- (B) ● 私は小松高校の、民族迫害についての課題研究を見させていただきました。タイトルがとても興味深く、内容面では世界における迫害の例を挙げて、宗教や政治などの様々な視点から迫害について掘り下げられていたのがとてもおもしろかったです。また、パワーポイントも見やすかったです。
 - 小松高校の、民族迫害についての発表を見ました。世界に目を向けたテーマでとてもいいと思いました。迫害の背景を知ることができて理解が深まりました。
- (D) ● 平安女性の死生観を拝見しました。平安時代に強い影響を与えた浄土教とつなげて考えたことはとてもいいと思います。男に対する強い執着心があるとおっしゃっていましたが、それは現代でも同じことがいえると思います。平安時代独特の観点から見てみてはいかがでしょうか。古典作品には、「頓死」や「恋の病」で死ぬ作品も多々あります。死因の書かれ方にも着目してみると、もっと考えが深まると思います。
 - 平安時代の女性の死生観についての発表を見ました。和歌をもとに考察していて説得力がありました。



(F) ● 多くのALTに質問していたので意見に偏りがなかったのがよかったですと思いました。

(H) ● 日本人の発音に注目して研究しているのが面白かったです。一般の意見だけでなくALTの意見も考慮して考えているのが良いと思いました。私もイントネーションを意識して英語を話そうと思います。

JICA 出前講座×Jゼミ 3月16日(火)@本校情報室

Jump Over the Border

世界へ続く「道」を知ろう、世界を変える「現場」を知ろう



●海外研修事業の代替として、JICA北陸様のご協力により、特別授業を実施しました。

JICAのフィリピン事務所とZoomで繋ぎ、現地の福山祥さんから、今取り組んでいらっしゃるお仕事について、また高校、大学での学びや就活についてお話をいただきました。多岐にわたる業務を行っていらっしゃる福山さんですが、お仕事の一つはマニラ初の地下鉄の開設だそうです、「人のために役立つ、大きなモノを作りたい」という夢をまさに実現していらっしゃるそうです。また、本校卒業生で、現在JICA北陸で勤務なさっている佐野夏希さんには直接来校いただき、北陸地区(特に能登)とフィリピンの連携についてお話をいただきました。中学・高校時代に陸上部で活躍された佐野さんは、高校、大学、そして社会人になってからの多くの貴重な経験を、後輩の目線から分かりやすく語ってくださいました。

《生徒の感想》

- 今までJICAについてほとんど知らなかったが、具体的に様々な活動をしていることを知ることができた。国や県というレベルだけでなく、小さなボランティア団体や大学などとも協力しているのが分かった。また、能登の里山・里海と同じ課題を持つフィリピンの地区で、能登の人材育成のノウハウを導入していくという考えには驚いた。
- 日本がかつて多くの国から援助を受けていたことや開発途上国が現在も多く存在することがとても驚きだった。世界の問題は自分に関係ないことはないと思った。
- SDGsの前にMDGsの前に存在していたことを知った。不平等や不満を解消するためにインフラ整備が大きく関わっていることがわかり、JICAの活動がいかに重要か考えさせられた。
- 佐野さんのお話にあった「積極性」という言葉が印象に残った。佐野さんのように積極的な行動を心がけていきたい。
- 福山さんの、援助は「やってあげるもの」「人助け」ではなく、むしろ「やらせてもらうもの」という言葉が印象に残った。自分でやりたいことを楽しんでされているのは素敵だと思った。



バネは、ぎゅっと縮めば縮むほどJumpのための大きな力を蓄えます。今年度はコロナ禍で多くの行事が実現できませんでした。悔しい気持ち、悲しい気持ちを、縮んだバネのイメージにしてください。みなさんの両足には今、国境を超えるための大きな力が蓄えられているはずです。いつか、小松高校を、石川を、日本を飛び出て、世界を大きく変えていくリーダーの1人となることを、心から期待しています！

